

44 そうして、イエシューさまはユダヤ一帯の寄合よりあいを巡めぐって、教えつつ語りつつ歩き続けなされた。

●第五章

二四・漁師を弟子にする

参照 マタイ 4 18-22、マルコ 1 16-20

1 さて、大勢の人が押し合いへし合いイエシューさまのところところに寄り集まって来て、神さまの思いを語るその言葉に耳を傾けており申した。イエシューさまはゲネサレの湖の畔ほとりに立っていなされたが、
2 見ると、湖の岸辺に小舟が二艘にそうもや舫はつていて、漁師どもが舟から下りて、網を洗っているところところでござった。
3 そのうちの一艘はシモンの舟であつたが、イエシューさまはそれに乗りこんで、

心親しきふるさとの都言葉にて、

シモンにこう頼みなされた。

「少し岸きしから離はなれでアがはな（雇よめりたいが、）
チヨコツと漕こぎ出してけんねアベがあ（くれないか？）」
ケ

そうして、その小舟の中に腰を下ろして、集まっていた人々に教え始めなされた。

4 話が終わってから、イエシューさまはシモンに言いなされた。

「いま少し深ふかア所ところに漕こぎ出せや。漁りをすべア（しよゝ、網あみを下ろしてみろ。」
ケ

5 シモンが答えて、言つた。

「いやあ、親方おやうだ、俺達おれだちはね、一晩中よふとちとんでもねア骨折うざねはり仕事をしたんでがすよ。それでもひどい不漁ふとでがしてね（不漁ふとでしてね、）何も捕とれながつたんだ。

んだども、まあ、お前様めアさまがそう言うんだがら、ようがす（いいですよ、）網あみを下ろしてみべア（みましよう。）」
ケ

6 やつてみたら、物凄ものすごいい大漁で、何ともかんともドツサリ魚うしがその刺し網にかかつて、今にも網が張

り裂けそうになってござる。7 ペト口らは「大慌てに慌てて」仲間の小舟に声をかけて、頼みこんでござる。

「やあい、助けろぜア（手伝ってくれよ！）」ケ

そこで仲間が手伝いに来て、二艘の舟に魚を入れたところが、舟は魚でいっぱいになり、今にも沈みそうになってござる。

8 この有り様に肝を潰したシモン・ペト口はイエシューさまのお足下にペタンと膝をつき、船底に額をゴリゴリ押しつけて、言ったことには、

「旦那、俺みでアな掟も碌に守り得ねア罰当り者
「アこうしてお側近ぐさいるのでせア勿体なくて恐れ多くて身ア縮みアす！ 如何にか、如何にか（どうか、こ）の俺からいまちよこつと離れでくなはりやんせ！」ケ

とは言っても、魚で魚で今にも沈みそうに溢れ返っている狭い舟の中、互いに身動きもならぬ有り様でござったが、そんなこと

にも氣の行かぬ

9 シモンも、これといつしよにいた者たちも、この「驚くべき」大漁には腰を抜かして動転したのでござった。10 シモンの友で、「網元の」ゼベダイ「親方」の倅のヤコブとヨハネもそこにいて、ともに腰を抜かした仲間でござった。

イエシューさまは

カラカラとうち笑い、底抜けに朗らかな大声で

シモンに向かって、言いなさった。

「何時までもそう畏まつてるのば止めろぜア。お前が今つからア人をすなだる漁師になるんだ！」ケ

11 「それを聞いた」その者たちは、

「おう！」とばかりに勇みに勇み、すぐさま

小舟を岸に引き上げ、一切金財打ち棄てて、「それから」イエシューさまにつき従ったのでござった。

二五・腐れ病を治す

参照 マタイ 8 1-4、マルコ 1 40-45

12 さて、イエシューさまがある町にござったときのこと、御覧あれ、そこに体中ひどい腐れ病を患^{わづら}つていた一人の男がござった。

① 腐れ病の身は町中に住むこともならず、人に近寄ることもならず、もしも人がそばに寄ってくれば、自らの口を覆って「この身は穢^{けが}れてござる！」と叫ばなければならぬ定めでござった。この男はイエシューさまの噂を耳にし、何としても治していただきたいものと、禁を犯して町に入り、決死の覚悟で物陰に人目を避け、待ち伏せてい

たものでござる。

この男はイエシューさまを見るや、顔を地べたに擦りつけて、こう願つてござる。

「もし、旦那！ 其方様セア（さへ）その氣になりやらば、この俺をサツバビ美しく治すにようがす。治すことがおできです！」[㊦]

13 イエシューさまは手を伸ばして、その男の肩をシツカリと掴んで、こう言ひなされた。

「勿論だ！ サツバビ治れ！」[㊦]

すると、その腐れ病の憑き物が逃げ出して、病はたちまち奇麗サツパリと治つてしまつたのでござった。

14 イエシューさまはこの人にしっかりと言いつけなされた。

「この事を誰さも語んなよ。ただ、お前さんが治つた証にするためだ。祭司さまの所へ行つて、モーセさまの決めやつたように、② 浄めのお供物を捧げなれ（捧げなされ）。」[㊦]

奇蹟の大漁

(ルカ福音書五章一一一節)

私たちは今日、ラ・ヴェナード島でミサを祝い、ある農夫の小屋の前の戸口に集まった。私たちの前には深い群青の湖が広がり、すぐ近くの岸には、私たちのボートが舫もやっている。この島の少年が、私たちに福音書を朗読してくれた。

イエスは二隻の舟が岸によせてあるのをごらんになった。漁師は舟をおりて、網をあらっていた。

ナタリーアが言った。——イエスさまは岸边でボートと網をごらんになったとき、ご自身も漁をなさりたいと思ったんだわ。それでイエスさまは、一隻のボートに乗り込んで、そこから、自分の網を打つ漁師のように、ご自分のたとえでお説教をなさった。イエスさまは岸边に押し寄せた人々をご覧になっていらっしゃって、ご自身を、人間を漁る漁師サナトのようにお感じになったのよ。そこでイエスさまはこのボートの持主を呼び寄せて、人間を漁る漁師になろうと考えられたのね。

ドン・ホセ・シャヴァリア、彼はこのラ・ヴェナード島に邸を構えている。——イエスが救世主メシアだ

という噂は、もうそこらじゅうで囁かれていて、今では貧しい人たちは皆、その心配ごとや苦しみから解放されるために、彼の所へやって来ていた。彼らはイエスを悲しませ、イエスはボートに乗り込んで、そこから解放の知らせを彼らにもたらした。そしてイエスは、人々が余りにもたくさんなのをご覧になって、地球上の人間よりも多いような気がなすったから、そこに居た漁師に言ったんだ。「あなたの職業を捨てて、私がこれらの人々を解放するのを手伝って下さい」とね。

そしてイエスは話を止められてから、シモンに仰せられた。「もう一度、沖に乗り出して、網を投げてみなさい。もう一漁してごらんなさい」。シモンはイエスに答えた。「先生、私たちは夜じゅう働きどおしでしたが、何も獲れなかったのです。けれど、あなたの御言葉ですから、網を打ってみましょう」。漁師たちが網を下ろすと、おびただしい魚が網にかかって、網は破れそうになった。

腕うでつこきの漁師のトマス・ペーニア。——天候つてのがよくねえ時には、どんなことでも起こりますだよ。この人たちやあ、一匹もつれねえつてのに、一晩中、漁をしてたんでござえましょう。シモンにやあ、もう一度、網を下ろす目的つてもんがねえです。だが、イエスさまが仰言ったんですから、シモンはもう一回だけ網を打ちますだね。ただ、イエスさまを信じてたからってだけです。シモンにやあ、天気がよくねえつてこたあ解つていて、その他の原因がなかったんだから。

他の男が付け加えた。——彼に多くの魚を捕えさせたのは、その信仰だった。

もうひとりの男。——シモンはイエスの言葉を聞いて、イエスを先生と呼んでいる。シモンはただそこに坐り込んでいたんではなくて、自分の網を打っているんだ。

フェリペ 僕が思うに、シモンはイエスを、彼らに何か非常に実際的なことを教えてくれることができる長^{おさ}だと信じたんだな。

フュリオ たとえイエスが、ひとりの労働者みたいに正確に知っていたとしてもだね。この時にシモンはイエスとともに放浪していたのではなくて、この舟の所有者に過ぎなかった。しかし、イエスが彼のボートから、人々に話しているのを聞いて、彼はイエスを先生と呼んだ。そしてイエスが彼に申し出ると、彼はもう一度網を打った。彼は即座にイエスに従ったんだ。シモンは言っている。「私に勧めてくれるあなたが居らっしゃるのだから……」これは僕たちの生活にとっても、必ず何か関わりのあることじゃないだろうか？

——もちろんさ、とドン・ホセが言った。このことは、信仰がすべてだということを、私たちに明かしてくれるじゃないか。シモンは学問など何もない男だったにもかかわらず、彼の目はもう開いていたんだ。シモンはすでにイエスが誰であるかを理解し、彼を信じていた。

——信仰をもたない者は、まったく無なんだわ——とナタリーエが叫んだ。

私は言った。——これは私たちにはまったく実際的な教えなんだね。信仰をもてば、私たちだって奇蹟を起こすことができるんだ。

トマス・ペーニア 僕の見方によれば、イエスさまはただ單純にこの人たちに同情して、彼らを助けたいと思召されたんだ。それには、ひとつの奇蹟を行うのがいいと、イエスさまはお考えなされたです。だけれども、イエスさまはこの人らに富を送ったというわけじゃあねえ。そんなものはこの人たちを何も助けねえどころか、むしろ反対に彼らを墮落させますだよ。だから、イエスさまは、ペテロ、シモン・ペテロに慎ましい奇蹟を行ったんです。魚を獲るってことだね。それは彼らを裕福にするというよりも、むしろ謙遜にするひとつの奇蹟だったんでしょう。魚が獲れたからって、人々は金持にゃあなりゃあしません、イエスさまを信じますでしょうが。そこでここにいる僕らも、イエスさまが富をお創りになっても、奇蹟が行われたなんて、信じちゃなんねえです。奇蹟を行うためには、人は謙遜でなくちゃなんねえですよ。

ひょっとしたら、この一網にあふれるばかりの魚という慎ましい奇蹟には、イエスのそれ以上の教えが隠されているのではないかと私が尋ねた。

フェルナンド島から来た青年のひとりが言った。——僕は、そこにまたもうひとつの教えを見るんだけどね、エルネスト。この網と漁のたとえは、イエスが後に行う他の奇蹟に役立っていると僕は思うんだけど。そうだ、この漁の奇蹟をまず網の中の魚そのものとして僕たちは見るんだけど、しかしました他のもの、つまり、網というのはイエスの教えではないだろうか。僕たちはイエスにとって、網にかかった魚なんだってことも、いくらか解って来ますよ。

チャエル あの歌を思い出さないかい？ さて、なんという題名の歌だったかな？

幾人かのものが歌い始める。——「俺たちは、捕まらなけりやあならない」。

ナタリーエ　そうよ。キリストによって。魚のようにね。

フエリベ・ペーニア　そうだ、キリストによってね。しかし、他の者に捕まっちゃあいけない。僕たちには、人間が誰によって捕まることになるかが解っているんだ。網のなかの魚が意味していることは、そういうことなんだよ。最初に釣りあげられた魚がペテロというわけさ。

これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、私から離れて下さい。私は罪人です」と言った。

オスカー　恐らく彼はきつと、自分が罪人であるという感情を持ったんだ。もちろん、彼は僕たち皆と同様に罪人だった。だが、これ以前に彼は自分をそう感じたことがなかったんだ。そして彼は、自分がこの奇蹟とばかり合っているのを見て、まるで頭を打たれたように、自分が汚れているのを感じたんだ。そうだろうか？

ラ・ヴェナード島の北部スペイン人のひとりで、メカジキ釣りの名人の男。——恐らくこの話は、不十分な信仰と何か関係があるんだろう。他の人間、いや他のすべての人間に対する信仰、違いかい？なぜなら、こういった信仰が俺たちを他の者から際立たせているんだ。なあにも信じちゃあいない人間は、他の人々から孤立してるんだよ。不十分な信仰ってのは、言ってしまうえば罪なんだよな。ペテ

口は十分な信仰を持っていなかった。だから、先生が網を打ってみろ、ってペテロに言ったんだ。違うかな？

フュリオ・マイレーナ そうだ、僕もそうだと思う。この世界はいつだって、コンプレックスだらけなんだ。貧しい人間たちは、教育のある人間たちや金持——ってことは、間違ひなく教育のある人たちということになるが——にコンプレックスを持っている。ペテロは神の現存を目にして、自分を卑しいものを感じたんだ。イエスがまさに、貧乏人たちのため、罪人たちのために、この世に來たということが、彼には解っていなかった。だからシモンは、イエスが自分と同じような貧しい人々に属しているんだってことを、考えもしなかった。シモンはこんな人々と一緒にやって行けるなんて、思わなかったんだ。

私は言った。——恐らく、フュリオ・マイレーナが言っているこのコンプレックスは、福音書では一種の不安として書かれているのと同じものなんだろうね。次の行を読んでみようか。

なぜなら彼も、彼とともに居た人々も皆、この大漁におどろいたからだった。ゼベダイの息子たちで、シモンの仲間だったヤコブとヨハネとおなじことだった。

マルセリーノ この種の不安が、貧しい人たちにはいつもあるんだと、俺は思う。金を持っている者は、俺たちの要件にいつも介入することができるけど、俺たちはそれに対して、どうすることもで

きないんだ、と考へている。学問のある人たちの前に立てば、俺たちだって自分を、まったく取るに足らない、無意味な人間だと思つてしまふ。俺たちにはいつだって金持や教育のある人たちが、俺たちを撓^{しな}ねつけようとしているという不安があるんだ。

しかし、イエスはシモンに仰せられた。「おそれることはない、おまえはこれから、人間を漁するであらう」。

同じように優れた釣り人であるドン・フリオ・ゲヴァラ。——イエスはシモンにたったの一言で、シモンがイエスとまったく同じになつて欲しいと言つたんだ。間違つてゐるかな？ イエスは人間を漁する漁師だつたんだ。

青年たちのうちのひとりが言つた。——イエスは彼の仕事を手伝うような漁師や他の労働者を求めていたのであつて、貴族を求めていたのではないんだ。事実、世界を変えるのは労働者なんだから、イエスはそうなされた。彼らは世界の主になるために呼ばれたんだ。彼らの多くはそれを知らなかつたけれど、イエスはそれを知つていた。

若い女性たちのうちのひとり。——それは明らかなことよ。イエスさまが怠け者や、搾取者や寄食者なんかを求められることは、あり得ないわ。イエスさまはこの漁師たちのような労働者や職人を探されて、この人たちを人間を漁^{すな}る漁師になさつたのよ。

女性たちのひとり。——以前には誰も省みようとしなかった貧乏人たちを、探すようにと、イエスさまがそうなさったんでございましょう。決して物の数に入らないような貧乏人たちを。だからイエスさまはペテロに、ペテロが魚なんかいないと言っているのに、網を下ろして見なさいと仰言^{おしや}ったんでしょう。するとどうでしょう、網一杯に魚がかかっていた。

オリヴィア 私たちは一度はつきりと理解しなくちゃあならないわ。ここに集まったすべての人々が、こっそりと利己主義や個人主義というものを隠し持っていて、この魚たちみたいに、いやらしくって引っこみ思案だったんじゃないかってことを……私たち皆がこの奇蹟の大漁の獲物だったってことをね。

彼らは舟を岸边に着け、すべてのことをおいて、イエスに従った。

若いフェリオ そうだ、彼らはすでにイエスを信じていたから、イエスとともに行ったんだ。彼らが携えて行った唯一のものは、このような奇蹟を行うことができる人に対する、奇蹟のような信仰と信頼感だった。

ナタリーエ 彼らは簡単に自分たちの仕事を捨てて行ったのよ。そうだわ、彼らは自分たちのボートも網もそこに置き去りにしたんです……

ロドルフォ きつとそれは、俺たちの共有ボートみたいな、みつともないものだった……

ナタリーエ 彼らは貧しかったのよ。だけど身の廻りの二、三のものは持っていた。貧しい人間が持つだけの物はね。だけど彼らはイエスに従うために、すべてのものを置き去りにしたのよ。

ドンナ・アンゲラ 彼らはイエスによって漁いさどられたのよ。

青年たちのうちの他のひとりが言った。——それは本当に奇蹟的な漁いさどだったんだな。網から取り出されたのは、そこら辺に居るモエラスやラグネロスやロバロスやサバレテスやグアビーナスやグアポータスじゃあなかったんだ。そして後に彼らは僕たちを釣り上げたんだ。だからこそ、ここにこうして僕たちが集まってるんだろ。オリヴィアが言ったようにさ。

マルセリーノ この漁師たちがそこにすべてを打ち捨てて行っただけから、神の御言葉が俺たちの島にやって来たんだ。恐らく俺たちは将来、この御言葉を反対側の岸辺にも、もたらすことができるだろう。もしかすると、ババトゥーラか、あるいはサン・カルロスかサン・ミゲリットーへ。

ドン・フリオ これまで、私たちはいつも湖から魚を釣り上げるだけだったが、しかし今はもう、私たちだって人間を釣り上げることができるってことを知っているんだ。もしも、私たちが自分たちのこまごました持物なんか執着しなければって話だね。

フエリベが言った。——そうだよ、そこまで来たんだよ、エルネスト。僕たちが現在、あるいは未来になる漁師として、僕たちは自分たちの利益のためばかりで漁をするんじゃないということに、厳格に注意しなくちゃならない、と僕は思う。キリスト教には属しているんだけど、他人を利用してやれなんてことばかり考えてる連中が多く居る。だが、イエスの漁いさどは、全人類の幸せのためのものな

んだ。これは愛の漁りなんだ。

アレファンドロ 僕たちは時々、夜通し働いて、何も獲物がかからなかったように自分を感じることもあるね。すると疲れ果ててしまつて、もう何もしたいと思わなくなるんだ。そこでニカラグアの他の地方や世界の他の国々でも、同じようなことがあるつてことを考えてみよう。彼らはまったく何の獲物もないんだ。しかし、だからって、がっかりすることはない。つまり、これこそ奇蹟の大漁なんだ。少なくともこのことを考えたら、人は突然、自分の網をいっばいにするところがあるんだから。私たちが別れを告げた時には、南の微風そよかぜが吹き、青い湖には無数のさざ波が立っていた。

さて、あの有象無象（うどうむどう）の人々がイエス様の所に群がり、その神の言葉を耳にしていた頃の出来事をここに記しましょう。

イエス様はゲネサレ地方の湖に立って、近くに二艘の小舟があるのを見ておられました。漁師たちは小舟から陸に上がり、網を湖で洗っていました。イエス様は、その二艘の内の一艘に乗り込みました。それはシモンの舟でした。イエス様は、少し沖へと連れて行ってくれるようにシモンに頼みました。そうして、イエス様は湖に浮かぶ小舟の中に座り、群集を教えられたのでした。

お話を終えた時、イエス様はシモンに言いました。「深い所まで、舟を出して下さい。そして、そこで網を下ろしてみして下さい。魚が取れると思いますよ。」

シモンはイエス様に答えてこう言いました。「先生、夜通し、

私たちはここで働いたのです。でも、何もかかりませんでした。まあ、それでも、先生がそうおっしゃるなら、やってみましょう」

やってみると、その網には物凄い数の魚がかかりました。網はもう、破れてしまうかと思うほどです。シモンとその仲間、小舟の中で、もう一艘の舟に合図をしました。手伝ってもらわないと、とても網を引き揚げられないのです。岸から仲間がやって来て、網をどうにか引き上げますと、二艘の小舟は魚でいっぱいになって、沈むかと思うほどになりました。

イエス様と一緒に小舟に乗って、間近にこの出来事を見て、シモン・ペテロはイエス様の膝のそばに土下座をして、こう言いました。「私から離れてください！私は全くどうにもならない罪びとなのです！主よ！」実に、シモンは恐怖に頭から爪先まですっぽり包まれてしまったのでした。この恐怖は、

そこにいた他の人々も捉えて行きました。そこにはヤコブとヨハネというゼベダイの家の息子たちもおり、シモンと一緒に働く仲間でした。この二人もまた、シモンと同じように恐怖に包まれました。イエス様はシモンに言いました。「恐れるな。今からあなたは、人を捕らえる人になる。」彼らは舟を陸につけてから、すべてをそこに置いたまま、イエス様について行ったのでした。